

## 「元庵」

### 元庵

元庵という茶室は、現代に再建されたものである。かつて有楽が大阪の旧居に建てた茶室の図面が残っており、堀口はそれが「如庵」と呼ばれていたのではないかと考えている。有楽苑の建設にあたり、この図面をもとに建設される茶室の正式名称が必要となった。堀口は、「元庵」と名付けることを提案した。

堀口は、この茶室の歴史を紐解くために、現在、如庵にまつわる遺物の一つ、南側に掲げられている扁額を参考にした。この額には「如庵」の名が刻まれているが、その日付は正伝院や如庵が京都に建てられるずっと以前の 1599 年である。堀口は、この扁額は以前からあった同名の茶室のために作られたもので、有楽が大阪を離れる際に持ち帰ったものであり、京都に建てた新しい茶室でこの扁額と名前を再利用したと推測している。

有楽は 1614 年の冬まで、大阪城のすぐ北西にある天満に住んでいた。その 3 年後、有楽の旧居は新たに設立された川崎東照宮に吸収された。1837 年に火災で焼失するまで、有楽の茶室は神社の一部として保存されていた。1871 年、この地に造幣局が新たに設立され、その敷地の一角に当時の茶室の一部で、客が入る前に靴を脱ぐために立ち止まる「沓脱石」が残されている。堀口は、元庵再建の際、この石を有楽苑に移設するよう交渉したが、実現しなかった。

元庵の再建が完了すると、扁額が必要になる。堀口は由緒ある木材を選んだ。新しい材料ではなく、かつて奈良の喜光寺にあり、大磯の三井家別邸で再利用されていた扉板を有楽苑の職員が京都に運び、表千家第 13 代宗匠の無盡宗左（1901-1979）に贈呈した。そして、無盡が扁額に選んだ名前を刻み、完成した茶室に「元庵」の名を正式に授けたのである。

元庵は如庵より大きく、内装も同様に型破りなものが多い。その中には、有楽の師である千利休の好みから明らかに逸脱したものもある。例えば、障子窓の木枠など、この部屋の仕上げには利休が嫌った竹を有楽は多用した。また、亭主の席と客の席を仕切る柱も竹でできている。さらに利休は、茶の湯の際に選んだ掛け軸や生け花を客に直接見せることを好んだが、有楽は床の間を、亭主の背後に配置した。